

20年ぐらゐ安土城を訪れていない方は、安土山の変貌に驚かれるに違いありません。麓で入山料を払うだけではなく、かつては深閑、鬱蒼としていた古城の姿が一変しているからです。

以前は山頂の本丸跡と天主跡、それに山腹の總見寺跡と五重塔を見ることができのみにてしたが、現在は麓の大手口からの道筋や両側の屋敷跡などが整備されました。今回はそんな安土城の見どころを紹介しましょう。

天正4(1576)年、天下布武の拠点として織田信長によって築城された安土城は、7年に完成を見ました。しかし、10年には本能寺の変の一端で焼失します。その寿命は築城から6年、完成から3年という短いものでした。

その後、信長が創建した總見寺に守られて現在に至りません。国家的事業で築城された

90秒におよぶ安土城は、400年のときを経て荒廃していききました。

大正15年に国史跡として指定された当時の本丸跡は瓦礫の山であったようです。昭和5年ごろに山道が整備され、山に登ることができるようになりました。これが旧の山道です。昭和27年に特別史跡に指定され、翌年にかけて発掘調査が行われます。日本で初めてこの城の発掘調査でもありました。

この調査によって本丸と天主跡の全容を見ることができるようになりました。本丸御殿や天主跡に残る礎石は当時のものです。よく見ると柱の痕跡、火災を受けた跡、建物倒壊の痕跡がひっきり返った礎石などを見ることができま

す。天主は「地下一階(礎石のある位置)五層七階建」で、約50呎の高さがあったといわ

安土城の見どころ

れています。その規模は東大寺大仏殿よりも高く、一階部分は姫路城天守よりも大きいと考えられています。

安土山全山が安土城です。眼下に広がる水田地帯は、かつては内湖で、安土山は湖に浮かぶ船のようでした。晴れた日には長浜城も見ることが出来ます。琵琶湖のまわりに安土城を含めた4つの城が築かれて「湖城ネットワーク」と呼んでいることは21回目に



安土山全山が安土城です。眼下に広がる水田地帯は、かつては内湖で、安土山は湖に浮かぶ船のようでした。晴れた日には長浜城も見ることが出来ます。琵琶湖のまわりに安土城を含めた4つの城が築かれて「湖城ネットワーク」と呼んでいることは21回目に

記したところで。

昭和30年代からは、本丸全体の石垣修理が実施され、現在の姿になりました。なお参考ですが、築城時の石垣を写真に収めたい方は、伝二の丸跡および天主台の石垣がおすすりです。二の丸入り口前の仏足石や「蛇石」伝説のある大石もこの修理の時に石垣から発見されたものです。

滋賀県では大切な文化財としての安土城跡を守るため昭和5年ごろから50年代にかけて、保存修理を行ってきました。そして、平成元年からは20年計画で平成の大修理に着手、完成を見ました。それが大手道を中心とした復元整備で、幅約6呎、直線約1300呎もある威風堂々とした石段が新たに発見されました。

内湖に突き出した半島が安土山。内湖が干拓される前の「湖上に浮かぶ安土城」を伝える貴重な写真

整備では、失われた石を補填しながら本物を使用し、復元がなされています。本物は道の両側に多く残っていますので、溝に落ちないように注意し、どの石段や石垣が当時のものか確かめてみてください。道の両側には3呎を超える石累が立ちほだかり、その内側に家臣の屋敷群があったことも調査の結果わかりました。現在、伝羽柴秀吉邸跡と前田利家邸跡が整備されています。

変わってしまった安土城跡の姿に古城のイメージを懐かしむ方、石垣の規模に驚かれる方、建物がないことに不満を持たれる方。さまざまに思いがありますが、大切な文化財を後世に伝えていくことが最も大事なことです。

「湖に浮かぶ城」の歴史ロマン。ぜひ現地で思いをはせてください。

(滋賀県文化財保護協会 木戸雅寿)

湖に浮かぶ城のロマン